る。古郷にもさうした名稱はあるまい。

タチカゴエ　田近越　元祿十二年の十村書上に、河北郡今町の際から南千石・今泉の間に出で、松根村城山を通り、越中礪波郡末友に出る道を田近越といふとある。

タチカハチマンジンジャ　田近八幡神社　河北郡八幡・二日市入會の地に鎭座し、田鹿八幡宮とも書く。式内等舊社記に、『田鹿八幡神社。田鹿八幡村境鎭座。古代之神寶共傳來。畜社也。』又淺加久敬の道程記には、『二日市村。村の端に小橋あり。右の山際に八幡宮あり。故ある宮なり。』とある。但し近世波自加彌神社を合祀し、社號も亦波自加彌を稱することになつてゐる。

タチガハマ　館ヶ濱　→タヅルハマ　田鶴濱。

タチカハロクエモン　立川六右衞門　父は浦野長右衞門。初めて前田利常に仕へて百五十石を領し、主命に依つて氏を改めた。寶永四年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

タチコンヤ　館紺屋　金澤で染色を業とする者の中、最も早くその名を知られたものに館紺屋がある。館紺屋の祖高桑備後は、戰國の時一向一揆の魁として石川郡鶴出に居たが、天正八年佐久間盛政の尾山城に鎭するに及び聲息を潛め、備後の子五郎は河北郡森下に移つて染色に從事した。世に館紺屋とも森下紺屋とも言はれたもの是である。五郎の子孫十郎の時、慶長三年利家から向後染物を森下紺屋孫十郎一人に命ずるとの書を受けた。この頃森下を出て金澤紺屋坂の附近に居たが、次いで慶長五年には利長から孫二郎（ここには孫二郎とある）に紺屋頭たることを命ぜられ、後又利長に高岡に從ひ、千保河邊畑草町に居り、その歿後金澤に歸り、元和五年孫二郎は利常から紺屋頭の命を得たが、當時前の屋敷が公地となつてゐた爲、暫く味噌藏町の味噌部屋に居り、更に材木町に轉じた。この宗家は後に四郎兵衞といひ、支家は大樋町に住して新五・新助などというた。

タチコンヤデンショ　館紺屋傳書　一册。加賀藩の御用染物師館紺屋に、前田利家・利長・利常三世から與へた書札十一通を集め、末にその家の由緒書を附したものである。文書の原本は支族館紺屋新五に傳はつて、宗家四郎兵衞ではその寫のみあつたのである。

タチダイ　太刀代　→バダイ　馬代。

タチツクリノキ　太刀作之記　一册。前田綱紀が藩臣伊勢貞廣等に太刀作の事を辭れたによつて書上げたもの。奥書に『右古御太刀作之次第、家傳之趣奉調獻之候以上。元祿十六年七月六日伊勢右京貞廣判伊勢監物貞意判』とある。

タチナカノヤカタ　館中の館　羽咋郡柴垣に在る。芝原將監一名館中將監の館迹であるといふ。→シバハラジョウ　芝原城。

タチノヤクシ　館の藥師　珠洲郡正院の館氏邸内に在る石像を館の藥師と稱する。

タチバナ　橘　江沼郡西ノ庄に屬する部落。廻國雜記に、『加賀國にいたりたちばなといへる所に宿をかり侍りて、旅立もさつきの後の身なりけり我に宿かせ橘の里』と見え、名所方角抄に莖の浦から東の方にたち花といふ宿があると記するも是である。近世驛馬を置いた所で、江沼志稿に慶長二十年三月五日・寛永十六年二月二十日の人足傳馬定書が載せてある。

タチバナ　橘　能美郡板津郷に屬する部落。

タチバナカンサイ　橘觀齋　諱は應、字は子鼎、有朋と號した。觀齋は通稱でも號でもある。初め臥至郡柳田に生まれ、書を好んで大坂に上り會谷學川に從ひ、辭いで堺に至つて趙陶齋に學び、後更に染を細合半齋・龍草廬に受け、十一年の後金澤に歸つて、鵝群閑を開き子弟に教授した。天保十一年六月廿九日歿、年七十六。

タチバナカンサイ　橘觀齋　初名順也。初代橘觀齋の妻の甥で、養子になつたものである。町儒者となつて書道を教授し、寺子屋中の牛耳を執つた。明治以降小學教育に從ひ、三十二年七十三歳を以て歿した。

タチバナグチ　橘口　北陸七國志長享二年の條に、朝倉貞景の臣堀江中務丞景用は、富樫政親に加勢の爲一千餘騎を引率して江沼郡に馳着いたが、高尾城の陷落を聞いて歸らうとした時、一揆ども蹕ひ付いて橘口に相戰うたことが記されて居る。橘口は江沼郡橘附近の北陸道線をいふのである。

タチバナコウユウ　橘香融　金澤眞宗東派敬榮寺の僧。雲華院大含に學んで寮司に進み、明治十九年八月十七日寂。法諡正定院。

タチバナシマホ　橘島保　建武三年二月の壬生家文書に加賀橘島保の名が見えて、主殿寮領であつた。後世江沼郡西庄にも能美郡板津郷にも橘村があつて、その何れかゞ關係のあるものでなからうかと思はれるが、明らかでない。

タチバナシン　橘新　能美郡板津郷に屬する部落。

タチバナタイホ　橘大甫　金澤の俳人。通稱甫次郎。所居を觀月庵というた。初め町會所に出仕したが、後に明を失ひ、家に在つて諸國風客の來杖する者を引き、それと交を締した。安政六年六月三十日七十四歳を以て歿。二子あつて、兄を甫翠といひ、弟を島林甫立というた。

タチバナバンショ　橘番所　江沼郡橘の最も越前に近い地に設けられてゐた。各地より加賀藩に用向を帶びて來る使者等は、必ずここで役向・姓名等を述べた後でなければ通行を許されなかつた。故に之を橘村御使者改番所とも稱へた。

タチバナホクシ　立花北枝　金澤の俳人。通稱研屋源四郎又は三郎兵衞。もと能美郡小松の產で、磨刀を業とした。所居を靈天軒とも趙翠翠とも島翠翠ともいひ、趙廓又は趙北枝とも號する。喪の名殘・山中問答・北枝考・蕉門俳談隨聞記・附方八方自他傳等の著があり、又句空と共に卯辰集を編み、歿後の句集には北枝發句集がある。享保三年五月十二日歿し、心莖社に葬る。法諡は同寺の過去帳に廓趙北枝居士とあるが、趙廓北枝居士の誤記であらうと思はれる。北枝の姓は立花氏であるが、加賀染には土井とあるから、さうしたこともあつたのであらう。

タチバナボクドウ　立花牧童　金澤の俳人。通稱研屋喜三郎、一に彦三郎に作る。立花氏。加賀染に立花松葉とあるのは前名らしい。北枝の兄で刀劍研磨を業とした。その俳諧は初め椙林から出で、後に芭蕉に歸した。所居は帶藤軒又は圃辛亭。某年正月十九日歿した。嘗て支考と共に草苅笛の著がある。